

平成24年度 第2回 日本海スルメイカ長期漁況予報

— 別表の水産関係機関が検討し独立行政法人水産総合研究センター
日本海区水産研究所がとりまとめた結果 —

今後の見通し(平成24年8月~12月)のポイント

対象魚種：スルメイカ

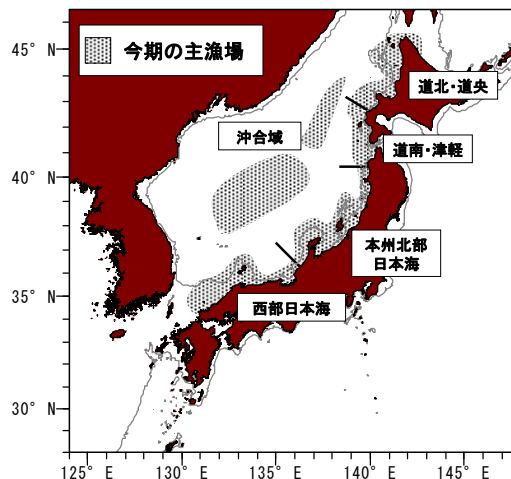
対象海域：日本海（道北・道央、道南・津軽、本州北部日本海、西部日本海、沖合域）

対象漁業：主にいか釣り漁業・小型いか釣り漁業

対象魚群：主に秋季発生系群、後半は冬季発生系群も含む

- (1) 来遊量：前年および近年平均を上回る。
- (2) 漁期・漁場：8月の北海道周辺海域が中心。
- (3) 魚体の大きさ：北海道周辺では前年および近年平均より大きい。

* 近年は最近5年間(2007年~2011年)



問い合わせ先

水産庁 増殖推進部 漁場資源課

担当：沿岸資源班 新村、長谷

電話：03-3502-8111(内線6800)、直通電話：03-6744-2377、ファックス：03-3592-0759

当資料のホームページ掲載先URL

<http://www.jfa.maff.go.jp/j/press/>

(予報の詳細についてのお問い合わせ先)

独立行政法人水産総合研究センター 日本海区水産研究所 業務推進部

担当：関根、中島

電話：025-228-0451、ファックス：025-224-0950

当資料のホームページ掲載先URL

<http://abchan.job.affrc.go.jp/>

<http://jsnfri.fra.affrc.go.jp/>

平成24年度 第2回 日本海スルメイカ長期漁況予報

今後の見通し（2012年8月～12月）

対象魚種：スルメイカ

対象海域：日本海（道北・道央、道南・津軽、本州北部日本海、西部日本海、沖合域）

対象漁業：主にいか釣り・小型いか釣り漁業

対象魚群：秋季発生系群、後半は冬季発生系群も含む

1. 道北・道央（小型いか釣り）

(1) 来遊量・漁況：前年および近年平均を上回る。

(2) 漁期・漁場：8月の道央海域が中心。

(3) 魚体の大きさ：近年平均より大きい。

2. 道南・津軽（小型いか釣り）

(1) 来遊量・漁況：前年および近年平均並み。

(2) 漁期・漁場：9月～10月は漁獲量が低下する。

(3) 魚体の大きさ：近年平均より大きい。

3. 本州北部日本海（小型いか釣り）

(1) 来遊量・漁況：前年並み、近年平均を下回る。

(2) 漁期・漁場：活発な漁場形成はない。

(3) 魚体の大きさ：近年平均並み。

4. 西部日本海（小型いか釣り）

(1) 来遊量・漁況：前年を上回り、近年平均並み。

(2) 漁期・漁場：漁場形成は10月以降。

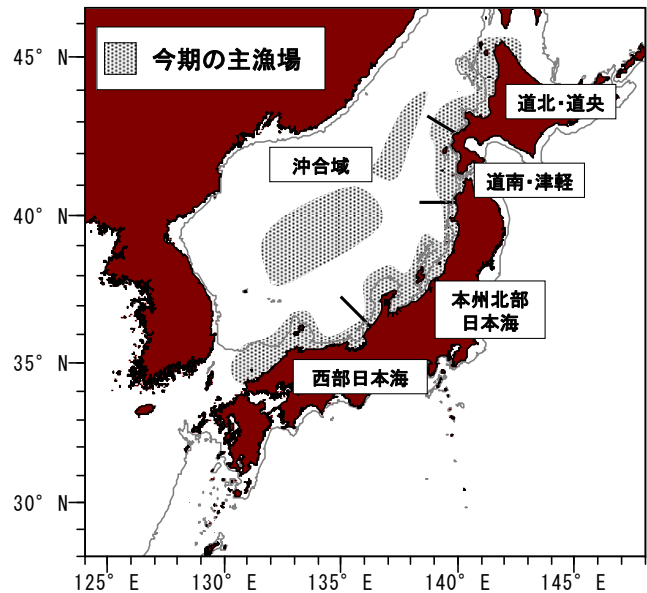
(3) 魚体の大きさ：近年平均並み。

5. 沖合域（いか釣り）

(1) 来遊量・漁況：前年を上回り、近年平均並み。

(2) 漁期・漁場：北海道沖が中心。

(3) 魚体の大きさ：近年平均並み。



* 道北・道央（宗谷～後志）、道南・津軽（渡島、檜山、青森県）、本州北部日本海（秋田県～石川県）、西部日本海（福井県～長崎県）、沖合域（日本海中央部）。

** 近年平均は最近5年間（2007年～2011年）の平均、前年は2011年を示す。

I 予報の説明

2012年6月までの漁況の経過、6月中旬～7月上旬に実施した日本海スルメイカ漁場一斉調査の結果、および冬季発生系群を主体とした太平洋側への来遊状況（平成24年度 第1回 太平洋スルメイカ長期漁況予報）を主要な情報として今期の各海域における漁況を以下の通りに予測した。

1. 道北・道央（小型いか釣り）

道北・道央海域では通常、7月～8月と11月に漁獲量のピークがある。前半は秋季発生系群が主対象であり、後半は冬季発生系群が主な漁獲対象となる。

【調査結果】漁場一斉調査結果では、今年の当海域への来遊尾数は道央海域では大きい個体が前年および近年平均よりも多かった。また、今年6月の漁獲量は前年および近年平均を上回った。

【予報の説明】調査結果では、大きい個体が道央海域で多く、6月の漁獲も順調であった。よって、今期の漁況は前年および近年平均を上回ると予想される。漁期・漁場は8月の道央海域が中心で、魚体は近年平均より大きい。

2. 道南・津軽（小型いか釣り）

道南・津軽海域では例年7月が漁期のピークで、太平洋側からの来遊群によって11月～12月にもう一つのピークが出来る場合がある。近年、6月～8月の漁獲量は減少傾向にある。

【調査結果】漁場一斉調査結果では、道南海域への来遊尾数は多く、前年よりも大きい個体が多かった。しかし、今年6月の漁獲量は近年平均を下回り、前年並みであった。

【予報の説明】調査結果では、当海域への来遊尾数が多いものの、6月の漁獲量が伸び悩んでいた。よって、今期の漁況は前年および近年平均並みと予想される。魚体は近年平均より大きい。なお、漁獲量は9月～10月には低下するものの、11月～12月にも漁期のピークが見られる見込み。

3. 本州北部日本海（小型いか釣り）

本州北部日本海では漁期の中心は5月～7月であり、8月以降にこの海域での活発な漁場形成は近年見られていない。

【調査結果】漁場一斉調査結果では当海域への来遊尾数は少なく、魚群も小型が中心であった。5月の漁獲量は前年を上回り、近年平均並みであったが、6月は前年並みであり、近年平均を下回った。

【予報の説明】調査結果では、当海域への来遊尾数は少なく、魚群も小型が中心であった。よって、今期の漁況は前年並みで、近年平均を下回り、活発な漁場形成はない見込み。

4. 西部日本海（小型いか釣り）

予報対象期間の西部日本海では、10月以降に主に沖合から南下する群が漁獲の主対象となる。ただし、近年は沿岸域に魚群が来遊しにくく、漁獲量が伸びない傾向がある。

【調査結果】漁場一斉調査結果では、2012年の日本海における来遊尾数は前年および近年平均を上回り、前年よりも大きい個体が多かった。一方、当海域の今年5月～6月の漁獲量は前年および近年平均を下回った。

【予報の説明】調査結果では、日本海への来遊尾数が前年および近年平均よりも多かったが、近年は当海域の沿岸域に来遊しにくい傾向にある。よって、今期の漁況は前年を上回るものの、近年平均並みと予想される。なお、漁場形成は10月以降の見込み。

5. 沖合域（いか釣り）

沖合域では大和堆付近が主漁場であり、8月下旬～9月以降には北海道沖の武蔵堆付近にも漁場が形成される。近年は魚体が小さいため、漁期のピークが遅く、漁場が北偏化する傾向も認められている。

【調査結果】今年の漁場一斉調査結果では、大和堆付近はほぼ前年同様の来遊尾数・魚体の大きさであった。一方、道南から道央には大きい個体が多く分布していた。

【予報の説明】調査結果では、道南から道央に大きい個体が多く分布していた。よって、今期の漁況は前年を上回り、近年平均並み、漁場は主に北海道沖に形成されると予想される。なお、大きい個体が前年および近年平均よりも多かったことから、漁期のピークは前年よりも早いと予想される。

II 予報に用いた主要な情報および調査結果

1. 漁場一斉調査結果

1) 分布状況

日本海におけるスルメイカ（秋季発生系群）の分布状況を日本海漁場一斉調査（6月下旬～7月上旬に実施）によって調べた。調査結果の概要は以下の通りであった（図1）。

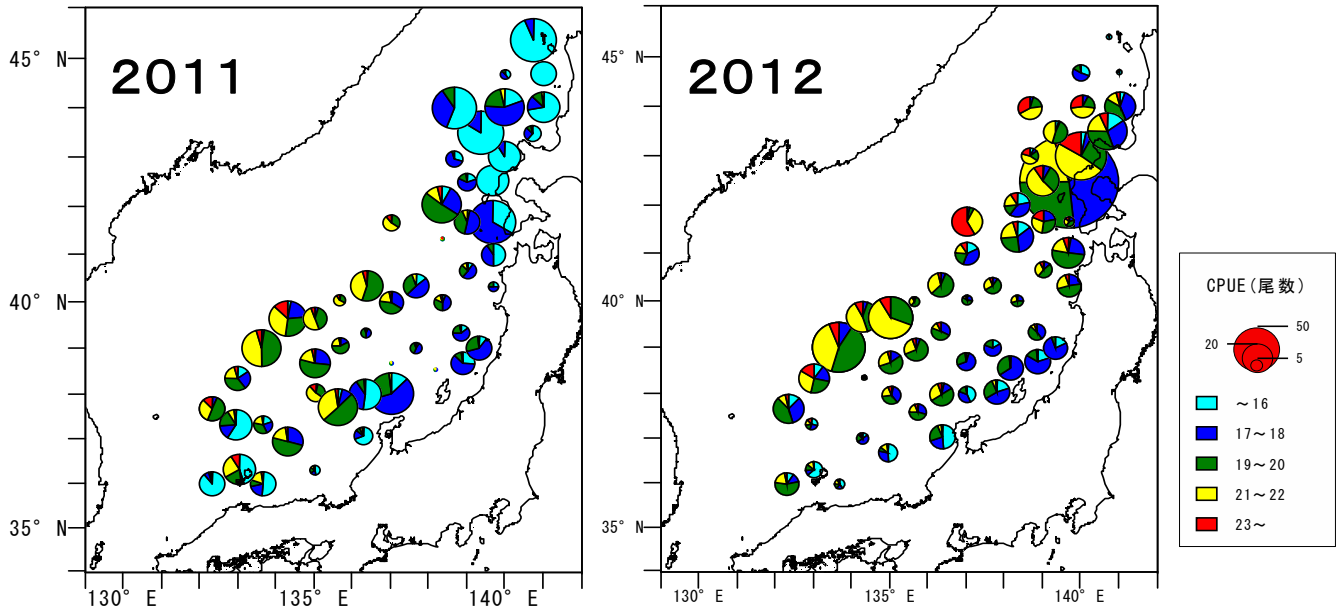


図1 日本海におけるスルメイカの分布状況

図中●の面積は各調査点の分布密度の指標となるCPUE（釣機1台1時間あたりの採集尾数）を示し、各色は各外套背長範囲(cm台)の比率を示す。

- (1) 道北海域ではほとんど分布していなかったのに対し、道央海域では、CPUE（釣機1台1時間あたりの採集尾数）が20尾～50尾の分布密度が比較的高い調査点が多くあった。前年と異なり、外套背長17cm未満の個体はほとんど見られず、外套背長21cm以上の比率が高かった。
- (2) 道南・津軽海域では主にCPUEが5尾～20尾前後であったが、奥尻島の北にCPUEが100尾を超える非常に分布密度の高い調査点があった。前年よりも外套背長が2cm程度大きかった。
- (3) 本州北部ではCPUEが主に5尾～20尾前後であり、分布密度の高い調査点がなかった。魚体の大きさは前年と同様に17cm～18cm台以下の比率が高かった。
- (4) 西部日本海でも本州北部同様にCPUEが主に5尾～20尾前後であり、分布密度が高い調査点がなかった。魚体の大きさも17cm～18cm台以下の比率が高かった。
- (5) 沖合域では、CPUEが20尾以上の分布密度が比較的高い調査点が多くあり、大和堆付近ではCPUEが50尾以上の分布密度が高い調査点もあった。魚体の大きさは前年と同様に外套背長19～22cm台が大半を占めた。

2) 資源水準

日本海漁場一斉調査において、釣獲試験を行った全調査点の平均CPUEを日本海におけるスルメイカ（秋季発生系群）の資源量指数とした。資源量指数は、1970年代に減少し、1980年代には中位～低位水準であったが、1990年代には増加し、中位～高位水準になった（図2）。その後、資源量指数は2002年に最も高くなったが、2003年～2007年には水準がやや低下した。2012年の資源量指数は17.32尾であり、前年（16.59尾）および近年平均（16.33尾）を上回った（それぞれ104%、106%）。

3) 魚体の大きさ

資源量指数で重み付けした外套背長組成を図3に示す。2012年は20cm台にモードがあり、前年よりも大きい個体が多かった。近年（2007～2011年）平均と比較しても大きい個体が多く、それ以前（2002年～2006年）の平均に近い外套背長組成であった。

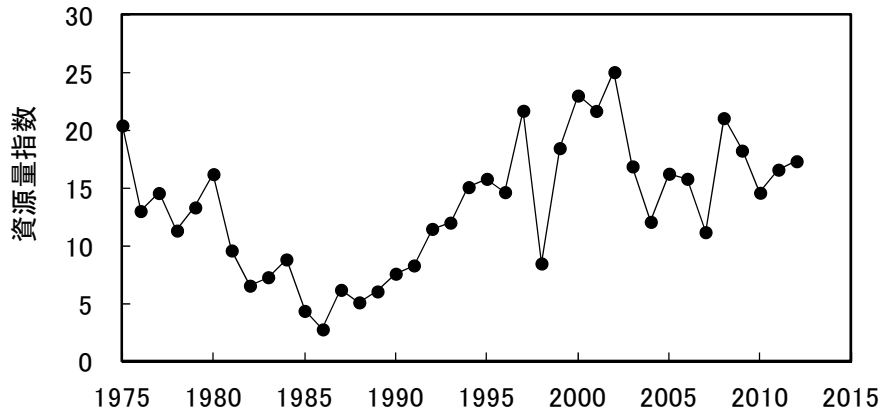


図2 日本海におけるスルメイカ（秋季発生系群）の資源量指数の変化

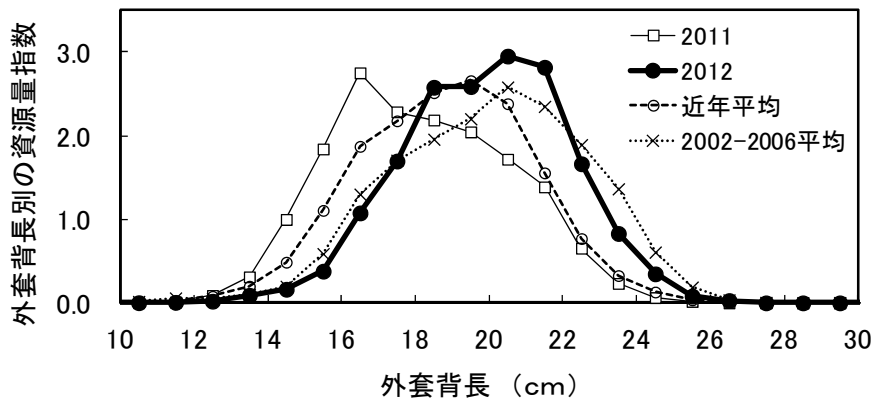


図3 日本海漁場一斉調査結果によるCPUE重み付け平均体長組成
各外套背長階級の値は釣機1台1時間あたりの平均採集尾数を示す。

2. 2012年6月までの漁況の経過

2012年6月までの各海域の月別漁獲量を図4に示す。4月まで西部日本海を中心に漁獲量が概ね前年および近年平均を下回った。5月の漁獲量は西部日本海で伸び悩んだものの、本州北部では近年平均並みの値となった。6月の漁獲量は道南・津軽および本州北部では近年平均を下回り、前年並みだったものの、道北・道央では前年および近年平均を上回った。

3. 太平洋側（冬季発生系群）の分布状況

太平洋側には主にスルメイカ冬季発生系群が分布する。これらは10月以降、宗谷海峡および津軽海峡を經由して日本海に來遊する。そのため、太平洋側の冬季発生系群の分布状況は10月以降の日本海の漁況に深く関係する。

平成24年度 第1回 太平洋スルメイカ長期漁況予報によると、太平洋側では、來遊量が漁獲量の多かった前年を下回ると予測されている。

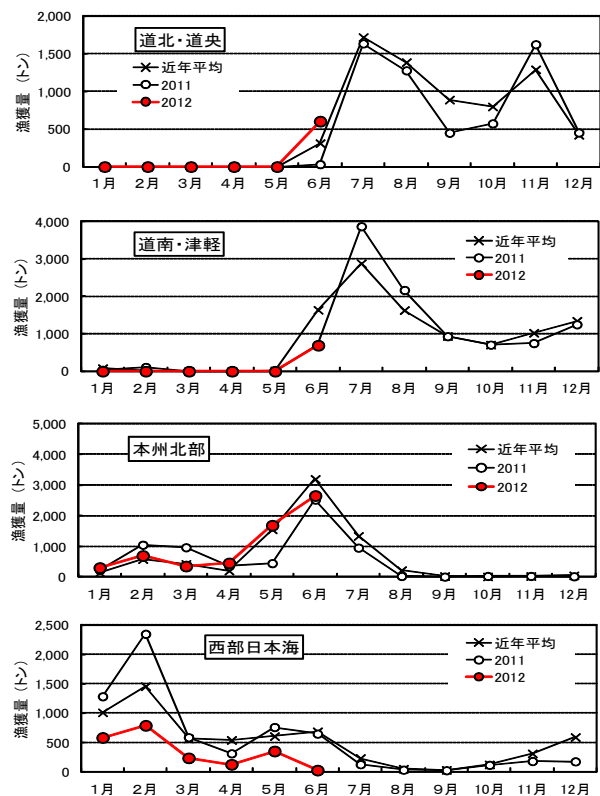


図4 日本海各海域の生鮮スルメイカの漁獲量（トン）
各道府県試験研究機関および漁業情報サービスセンターの資料より作成（一部未集計）。

参 画 機 関

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構 水産研究本部 中央水産試験場 函館水産試験場	京都府農林水産技術センター 海洋センター
地方独立行政法人 青森県産業技術センター 水産総合研究所	兵庫県立農林水産技術総合センター 但馬水産技術センター
秋田県農林水産技術センター 水産振興センター	鳥取県水産試験場
山形県水産試験場	島根県水産技術センター
新潟県水産海洋研究所	山口県水産研究センター
富山県農林水産総合技術センター 水産研究所	長崎県総合水産試験場
石川県水産総合センター	社団法人 漁業情報サービスセンター
福井県水産試験場	水産庁 増殖推進部 漁場資源課
	(取りまとめ機関) 独立行政法人 水産総合研究センター 日本海区水産研究所